

《実際の仕訳について》

仕訳の際、「借方～貸方～」と、仕訳を簡略化して書いてきましたが、実際の企業の場合はどのように行っているのでしょうか？実務では仕訳帳をいうのがあり、そこに取引が行われるたびに記入していきます。仕訳帳は総勘定元帳と合わせて、主要簿と呼ばれています。簿記の試験では、出題された形式で記入しますので、あまり下記の形式を気にすることもないでしょう。

仕訳帳の見本

仕 訳 帳

平成 年	摘要	元丁	借 方	貸 方
4	1			
	(現金)		40,000	
	(売上)			40,000
	東京商事に商品を販売			
4	5			
	(仕入) 諸口		60,000	
	(現金)			30,000
	(買掛金)			30,000
	神戸商店より商品を仕入			
4	10			
	諸口 (売上)			90,000
	(現金)		70,000	
	(売掛金)		20,000	
	大阪商店へ商品販売			

《仕訳帳の記入について》

- ・摘要欄はだまかにわけて考え左側を借方、右側を貸方として考えます。
- ・1行につき一つの勘定科目を記入します。
- ・勘定科目はカッコ書きで記入します。
- ・勘定科目の下に取引内容を記入します(小書きという)
- ・一つの取引を記入が終わると、区切りをつけるために実線を摘要欄に引きます。
- ・勘定科目が複数ある時は、複数の方の最初に諸口をつけます。
- ・諸口はカッコ書きをしないで記入します。

仕訳の学習を終えて・・・

ここまで一般的な仕訳の学習が全て終わりました。市販の簿記のテキストでは、仕訳の学習の際に、下図のような、「取引の8要素」(取引の結合関係とも呼ぶ)を最初に学習するテキストが見受けられます。そのようなテキストのほとんどが、仕訳は、これらの取引のどれかに該当するので、表を覚えましょう。と書いてあります。

例1の場合は、「商品を仕入れる 費用の発生」と「現金で購入 資産の減少」となり、表より「費用の発生と資産の減少」が結びつけるのです。

例1 販売用の商品 100,000円を現金で仕入れた。
(借方) 仕入 100,000 (貸方) 現金 100,000

しかし、初めて学習する人に、いきなり取引の8要素といわれても、「どれが資産なのか？どれが負債なのか？」また、「資産の増加と負債の増加」とテキストに書いていても、理解が難しいのではないのでしょうか？それよりも、現金を中心にして仕訳を学習する方が、簡単だと思いませんか？ということで、テキストでは「取引の8要素」を扱いませんでした。

図1

